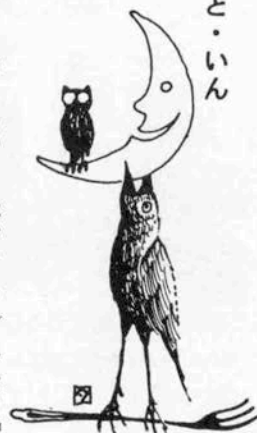


びっと・いん



★カントリースタイルの

お店でフランス料理を  
NHK神戸放送局の前に  
ある「ヘンリーのおいしい  
夢」は、今ではもう珍しく  
なくなった「手頃な値段で  
楽しめるフランス料理屋」  
の先駆的存在のお店。

古い家屋の廃材とレンガ  
でつくられた店内は、ヨー  
ロッパの田舎屋風にまとめ  
られていて、アットホーム  
な雰囲気がある。

おすすめは「ヘンリーの  
おまかせコース」(3千900  
円)で、プラス千500円でフ  
ルコースが楽しめる。また  
「魚介のクリーム煮パイ包  
み」(950円)、ケーキ・シャ



オープンキッチンで食事が楽しめます

ベット・フルーツを6品盛  
り合わせた「グラン・デセ  
ール」(800円)も大好評。  
おいしいものに目がない  
女性の方はぜひどうぞ。

■神戸市中央区中山手通2-4-12  
AM11:30~PM2:PM5:10  
PM3:17688(無休)

★多彩なメニューの中に

旬の味あり

生きた魚を目の前でさば  
いてもらい口にする醍醐味  
は、いけす料理ならではの  
もの。



いつも楽しい雰囲気のお店です

阪急王子公園駅から徒歩  
2分のところにある「寿し  
源・上店」もそんなお店。  
店内のいけすには、とれた  
てのいきのいい魚が泳ぎ回  
っており、食通の目を楽し

ませてくれること間違いな  
し。「安くて、うまい」と評  
判のこの店のおすすめは、  
その日に入荷した珍しい魚  
を盛り合わせた「三品料  
理」(千円)、「源まき」(千  
円)等だが、なかでも絶品  
の「サザエの和風スープ」

(千円)は一度食べたら、  
一生忘れられない程だ。

またブレブスの選手も  
よく来るので、プロ野球フ  
アンなら見逃せない店だ。

■神戸市中央区王子町1-4-10  
PM5:11PM11(日曜休)  
PM5:12059

★神戸・北野が

ラテンのリズムに震撼

パLAGアイ共和国の音楽  
大使として世界各国でコン  
サートツアーを行っている  
ロス・インディオスのライ  
ヴが4月19日、北野のミキ

シコ料理「ティファナ」  
(242-0043)で開か  
れ、つめかけた観客はラテ  
ンのリズムに酔いしれた。



ロス・インディオスの熱いステージ

★一種類ごとに生地が違う  
職人気質のケーキを

ファッション誌やグルメ  
誌でおなじみの「メゾン・  
ド・ファリーヌ」がプラン  
タン2号店の地下2階にオ  
ープンした。

このお店のケーキは、フ  
ルーツをふんだんに使い、  
とても美味しいのにどれも  
250~300円。その安さの秘密  
は、「いい材料を使った本物  
のケーキをたくさんの人に



ショッピングの帰りにお立ち寄り下さい

食べてもらいたい」という  
職人さんの頑ななまでのポ  
リシーにあるそう。製法  
も凝っていて、一種類ごと  
に生地を変え、スポンジの  
使い方にも気が配られてい  
る「姿」はまさに芸術品。

「青リンゴのムース」(280  
円)、「ミロワール・ブルー  
ベリー」(250円)等、ぜひ  
お試しを。

■神戸市中央区雲井通6-1-1  
AM10:PM8(水曜休)  
AM291-0077(内線314)

★メリケンパークへお越し

の方へ、どうぞひと休み  
元町通のコーヒーション  
「エポック」が今年で20  
周年を迎える。

普段はサラリーマンが客  
層の主流だが、土・日ともな  
ると観光客がどっと押し寄  
せるといふ。というのも、



くつろぎのひとときをあなたに

★K O B E  
デビュースポット

コーヒータウン  
ティールラウンジ

「碧い葡萄」

白い壁に大きな窓、地  
中海の風が吹く喫茶店。  
貿易センタービルの一筋  
東にある「碧い葡萄」は  
オーナーが替わり、4月  
4日から美人ママ・安田  
美佐枝さんが妹さんと二  
人でオープン。お昼のカ  
レーセット700円(さらだ、  
こうひいつき)はお手輕  
で嬉しい。カレーは、お  
母さんの経営するセンタ  
ープラザ西館のカレー専

この店はメリケンパークへ  
遊びに行く人たちの格好の  
中継ポイントというわけ。

サイフォンで淹れてくれ  
るオリジナルのブレンドが  
美味しい。使用しているカ  
ップも英国調の感じのいい  
ものが多く、ウェーターの  
接客もスマート。

他に、手作りのホットケ  
ーキもお奨め。

■神戸市中央区元町通3丁目  
AM8:PM8(日祝はAM9:)  
331-3694(無休)

★低予算で、高級感覚の  
活魚料理を存分に

北野坂のイスズベーカー  
ーのとなりに5月17日、  
「魚がし酒場 多聞丸・北  
野坂店」がオープンした。

門店特製なので、お味は折  
紙付き。

また、ケーキセット600円  
(チーズケーキ、オレンジ  
ケーキ)は、ママの手作り  
でお推め品。ひと味違うの  
は、サンバのリズムが込め  
られているから。お二人



白いカーテン越しに、花がきれい。

星形船を模した店内では

多聞丸チェーンならではの  
新鮮な活魚料理が、居酒屋  
並みのリーズナブルな予算  
で存分に味わえる。鯛のさ  
しみが480円、活魚盛合わせ  
が980円等々。なかでもおす  
めは「多聞丸」(6千980  
円)で、大人数のグループ



少人数ならこのカウンターでどうぞ

は15年間サンバを踊り、  
神戸っ子サンバチームの  
ダンスリーダーとして活  
躍している。しかし、し  
つとりと、一杯ずつカリ  
タで入れてくれるコーヒ  
ー(350円)はGOODノ  
営業時間は8時~18時  
だが、夜は貸切パーティ  
を受け付けてくれる。窓の  
外の花がライトアップさ  
れ、昼とは違った雰囲気  
が味わえます。一人30  
00円から、25~30人の  
パーティができます。

■神戸市中央区磯辺通1-11  
18カサベラ国際プラザビルB1  
AM8:PM6(日祝祭日休)  
251-5056

には最適。

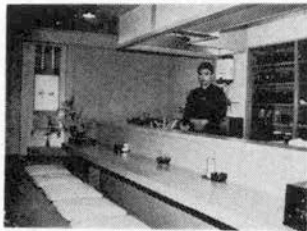
客層は、重役風のオジサ  
マから若い女性までと幅広  
く、会社帰りや宴会にはも  
ってこいのお店だ。

■神戸市中央区中山手通1-8  
18 互陽ビルB1F PM5:翌  
AM2 333-6611(無休)

★昼は気軽に弁当  
夜は本格的懷石

海文堂のうらにある「神  
戸料理・愛味(あいび)」  
は、新鮮で美味しい旬の味  
が楽しめる店だ。「家庭で  
は食べられない料理をお客  
様に召し上がっていただき  
たい」というだけあって、  
目と舌の両方を満足させて  
くれる。

星のおすすめは「こもれ



落ち着いた雰囲気のお店です

び(千円)「せせらぎ」(2  
千500円)、夜は5千~1万2  
千円まで3コースが用意さ  
れている。「こもれび」以外  
は要予約なので、注意を。

■神戸市中央区栄町通3-16-20  
矢代ビルB1F AM11:30~P  
M2:PM5:10(日無休)  
321-5435



## ボケット ジャーナル



★第1回小島輝正文学賞に  
樹谷優「北大阪線」が決定  
フランス文学者で神戸大  
学教授だった故・小島輝正  
氏は、生前、同人誌の論評  
を通じて新人育成に尽力さ  
れた。故人の意思を受け継  
いで設立したのが小島輝正  
文学賞（主催／小島輝正著  
作集刊行会）。

第1回受賞作は樹谷優さ  
ん（奈良市在住・64歳）の  
「北大阪線」と決定し、5  
月5日、兵庫県教育会館で  
「輝正忌と小島輝正文学賞  
贈呈の会」が行われた。  
当日は小島氏ゆかりの文  
学関係者ら100名が出席、樹



右が受賞者の樹谷さん

谷さんを祝うと共に、故人  
の想い出をこもこも語り合  
った。その中で詩人の馬部  
貴司男氏は「この賞は、今  
後の文学活動の中で一つの  
『起爆剤』となるだろう」  
と語り、同賞のもつ意義を  
強調した。

なお受賞作は文芸誌「選  
刻」第6冊に収録されてい  
る。

★初の神戸国際コミュニ  
ティセンターが開く  
5月28日に神戸国際コミ  
ュニティセンターが、旧市  
役所第3庁舎の江戸町SK  
ビルにオープンした。

同センターは市内在住の  
外国人への市政・生活情報  
の提供、並びに市民と外国  
人との相互交流を図る拠点  
施設として、神戸国際交流  
協会（笹山幸俊会長）が設  
置したものだ。

約240㎡のスペースには洋  
書、ニュースペーパー等が  
備え付けられ、ゆったりと  
ソファにもたれながら互い

の理解を深めようとする人  
々で連日盛況。

語学堪能な6人の専従職  
員があらゆる相談につて  
くれる。

■開館時間は10時から20時まで。  
土曜のみ17時まで。中央区江戸町  
92番地 江戸町SKビル5F

★クリスタルハーモニーが  
神戸にやって来る

新造豪華外航客船「クリ  
スタルハーモニー」が6月  
23日13時から26日5時まで  
神戸に入港し停泊する。



純白の船体をこの目で

同船は日本郵船株式建造  
している我が国最大の外航  
客船で、6月21日の完工・  
引渡しの後、神戸港で披露  
される予定。

7月5日横浜からホノル  
ルに向けて処女航海に出帆  
する前に、その優雅な船形  
を見れるというわけ。

★FMに負けるな！

ラジオキャンベーン

ラジオ関西が「日キャン  
ベーン」というユニークな  
名称のキャンベーンを今年  
末まで展開する。

★誕生日ありがとう運動



二十五周年感謝のついで  
盛会のうちに開催

昭和四十年五月、本運動がスタ  
ートして以来、多くの方の協力と  
支援に恵まれ、本日まで実践して  
参りました。今年は創立二十五周  
年を迎えるのを記念して、五月十  
二日に神戸市勤労会館で記念日を  
祝いました。

五月に入りまして、神戸、座  
経、読売、毎日、朝日の有力五紙  
が本運動と記念日の開催を紹介し  
て下さって雰囲気盛り上がり、  
関心のある方からの照会が相つぎ  
ました。当日は心配された雨も降  
らず薄曇のさす天候に恵まれて、  
約六百人もの方々の参加を得て盛  
大に開催されました。

先ず藤本代表が「皆様の長い間  
のご支援とご協力に感謝し、特に  
匿名で長いこと寄附を続けて下さ  
る数の誤さんや名和岩根さんには、  
心からお礼を申し上げたい」と  
挨拶しました。

そして、元NHKテレビの子供  
番組の「お母さんと一緒」の米田  
和正さんグループと、楽しく遊び  
ました。

次に当日の主旨を印刷したカ  
ードをつけた風船を一齐に空に向け  
て飛ばして、楽しい集いを終了し  
ました。風船は三重県、奈良県、  
愛知県などから「拾った」と連絡  
が来りました。私達の願い  
が、遠くまで飛びました。皆様、  
ありがとうございました。

誕生日ありがとう運動本部

651神戸市中央区御幸通8-1-16  
神戸市国際会館1階郵便局の隣  
電話 078-12311-21114

これはAMラジオの特色であるホット、ハート、ヒューマンの魅力を訴え、併せてラジオ関西のPRを図るもので、Hは共通のイニシャルを表わしている。



Hキャンペーンのロゴマーク

衝撃的な効果を狙ったというキャッチコピーは「いまラジオ関西は、すこくH(エッチ)」

今秋開局するFMキッスを含めて関西にもFM放送局が増えつつあり、AMの老舗ラジオ関西も負けじと動き出した。

★愛犬家の皆さんへ

レッツ・グルーミング

犬を飼っている人は世の中に多いだろうが、正しい犬の世話の仕方は案外と知



おしゃれな箱に入ります

られていない。

ただ可愛がれば良いというものではなく、犬の体を考えたブラッシングやシャンプーをしないと、犬の寿命にも関わってくるということだ。

今度発売された「ワンワングルーミングセット、ビデオ&グッズ」は、愛犬家にそんなノウハウを教えてくれる便利なテキストと言えそう。

30分のVHSビデオで手入れの方法を目で確かめ、ブラシ、シャンプー、ドライヤー等のグッズを使って実際に試してみると、その効果は充分。

家族の一員の愛犬に、優しい心配りをしてみませんか。

■問合せは㈱アピリティネットワーク  
404大阪府中央区本町橋2-13  
オカダビル4F 電話06-946-7787まで。詳しい資料を送ってくれます。またグッズを1名様、ビデオを5名様にプレゼントします。こちらは神戸つづグルーミング係まで本書でお申し込み下さい。

★新人アーティストに

スペースを解放します

ビデオ制作編集機能とギヤラリー機能を兼ね備えたビジュアルスタジオ「サカス・サカス」が元町駅山側に設立された。

同スタジオの真鍋祥子マネージャーが、長い間熱望

していたまだ若く知名度の低いアーティストの発表の場として、4月26日にオープンしたものの。

具体的には会社案内、イベント記念、商品紹介等の多岐にわたったビデオの企画制作。またギャラリーは絵画、彫刻、写真、デザイン等の展示、販売に多目的に使用できる。

「若い人達に気軽に利用して頂きたいですね」という真鍋さんをはじめ、4人のスタッフが待っている。■中央区下山手通5-9-1 信業ビルB F 電話382-06689



発表の場を提供します

★老化や成人病防止の一助

SOD様作用食品

■磯紅花(森一夫社長)では、近年大きく注目を集めているSOD(スーパー・オキシド・デイスムターゼ)様作用食品の販売に取り組んでいる。

このSODとは、微生物から動植物まで幅広く生物

## 図書ガイド



都市の遠近  
朝日新聞大阪  
本社芸芸部編

大阪・兵庫・奈良・京都のあらゆる街・町への思い入れを綴った文章関西文化界から集め、それぞれ築地仁氏のモノクロ写真を配して朝日新聞に100回に渡って連載されたものをまとめたのがこの本である。知っているようで知らない、かつて関西の断片が新鮮な驚きを以て迫ってくる写真集。添えられたスパイシーな文章が読ませる。(東方出版刊 2800円)



森田陽樹  
余生四十年  
小池 義人

シベリア抑留から戻って40年間に著者がいるんな機関誌や会報に寄稿した文章をまとめた本。著者の小池氏は大山須磨寺管長を務められ、シベリアの鉄格子の中で、等の著書がある。本書では、シベリアでの体験から、著者がこの20年の間復興に情熱を燃やす「須磨祭」への思い入れなど、丹念に書き綴られている。(朱鷺書房刊 1400円)



安西 冬衛  
富上 芳秀

二十代の後半から三十代の大部分にわたって安西冬衛にこだわり続けて来た著者の安西陽集成。安西冬衛とは、「てふてふが」一匹龍、龍海峽を渡って行った。(「春」)がよく知られているが、このモダニズム派詩人のまとまった評論は他には見当たらない。全15章の論考は諸誌に発表されたものではあるが、秀れた果実の収穫である。(未來社刊 2575円)



● KOBE POST

★1990年「書を世界に」望月美佐久の美に生きる集いが、6月14日（木）午後6時より、生田神社会館4F大宴会場で開かれます。会費15、000円プログラムは「大聖地ベネチスを訪ねるインドの旅」スライド/インド料理を含むディナー申込み費51117084

★姫路獨協大学教授の小室豊久氏が、兵庫ポランテア協会の会長に就任され、5月に初の随想集「陽だまりの詩」を出版。6月22日（金）午後6時より、神戸ポートピアホテル大輪田の間で、小室豊久先生を抬げます各界の集い、が開かれます。会費12、000円

★第5回関西大賞は5月9日、関西大賞推進協議会（奥田東会長）より大賞に山口賢子氏、橋本宇太郎氏、さわやか賞に守田厚子氏、小泉美喜子（本誌編集長、中澤弘幸氏、波多野優香氏に決定。6月10日午後3時より、神戸国際会議場メインホールにおいて、関西大賞贈呈式が行われます。

★6月3日ポートピアホテル南館1階大輪田の間で、兵庫県庁職業訓練協会の主催により、業界の振興発展に寄与し果敢劣者表彰を受章した、荒津正美氏受立記念祝賀会が開かれます。

◎訂正とお詫び 本誌月号神戸まつりガイドの名刺広告で、株式会社菊水本店の取締役社長は会長に、電話番号は三八二〇〇八〇に訂正し、心よりお詫び致します。

★踊り続けて20年



今年も燃えました

165万人という最多の観衆を集めた第20回神戸まつりだが、神戸まつり・おまつりパレードに第1回より参

加している「月刊神戸っ子サンパチム」に記念トロフィーが贈呈された。これは20回連続出場している10団体に神戸市民協働会事務局から贈られたもの

「あなたも咲かそう、童話のつぼみ」という今回のコンセプトに相応しい子供達に夢を与える素敵な童話を書いてみませんか。テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚、切りは8月20日消印まで有効。

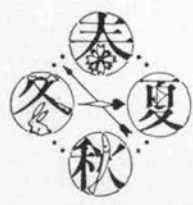
■応募、問い合わせは  
51大阪府中央区淡路町2-3-9  
神戸レイク広報室まで  
電話06-2266-0909  
応募要項は各支店にも用意されている。



誰もが経験した 童話の世界

★童話を書いてみませんか  
「ほのぼのレイク」でおなじみの消費者金融の株レイクでは、創作童話イベント「第8回ほのぼの童話館」を実施、創作童話を募集している。

花 時 計



欲しい、演出力

「神戸まつり」も満二十歳を迎えた。メインのパレードは五月二十日、「神戸まつり」としては久しぶりの快晴に恵まれ賑やかに、華やかにパレードが行われた。

フラワー・ロードなどパレードが行われる沿道

には見物の市民、観光客がぎっしり、百六十五万人へ主催者発表の人数に埋もれた。流石に二十歳、はたちの年輪を感じさせるに充分なパレードであった。国際色豊かな、市民の思い入れ、気持のこもったなかなか素晴らしい内容をもったパレードが展開され見物の人たちに好感をもって迎えられた。

ただ、二十歳のパレードとして反省すべき点も指摘される。パレードを総合する演出家が不在で

あることだ。演出というのはステージの総てを把握する。いろいろな役者の持味を存分に引き出しすばらしい舞台を創りだす。そのために、何が魅力があるのか知り尽し、縦横にその良さを發揮させる。パレードにその配慮が乏しい、折角、何時間もパレードを待ちながらパレードはあたたかさと馳け抜けていった。観客の身になって、演出できる人を得たいものだ。

△Y△

# K.F.S. NEWS 158

コウベ・ファッション・ソサエティ

神戸ファッション市民大学OBによるグループ  
神戸のファッション都市化をめざす

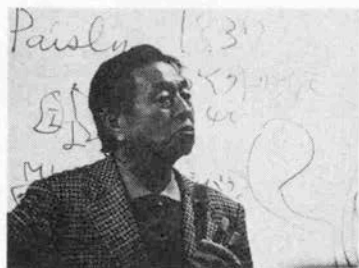
事務局／神戸市中央区東町113-1 大神ビル9F  
月刊神戸っ子内 TEL.078-331-2246

●4月一般公開講座

立亀 長三氏

(神戸芸術工科大学教授)

## '90冬は、唐草から渦巻きに エコロジィが続く



4月25日かんしんホールにおいて、神戸芸術工科大学教授の立亀長三教授が、「'90冬のヨーロッパ・ニューヨークの最新ファッション情報」を講演した。今回はバルセロナから英国グラスゴウのペーストにまで飛んで「なぜ流行するのか」というルーツ解明の旅をスライド約100点をまじえて力説する講義に、約200人が耳を傾けた。

「'89年はベーズリー模様が、'90の春は唐草模様が、これが'90の冬になると、なぜ渦巻模様になるのかということのルーツを訪ねて私はスペインのバルセロナへ旅立ちました。

2年後スペイン・バルセロナでオリンピックが開催される。このバルセロナの町は、カタルニア地方で、ピカソやダリ、ミロを生んでいるが、天才建

築家アントニオ・ガウディの教会は、今も三人の弟子が仕事を続けているのです。ガウディの作品を見るとまったく「エコロジィ」を感じるんです。この「エコロジィ」を生物の生態学といった意味から、今年は地球とか火山といった宇宙的な環境としてとらえています。ガウディの作品には海や山のもの彩られています。例えばヒトデとか貝とかね。このガウディの作品は、英国グラスゴウの近くにあるペーストという町の教会などの壁画にルーツがあります。そこには唐草から渦巻が現わされているから面白いですね。この起源が消費者を納得させるんです」と流行のルーツを解明した。

### ●KFS パネルディスカッション のお知らせ (KFSトーク)

今月はパネルディスカッションを行います。KFSについての要望や近況報告などはもちろんのこと、それ以外にも様々な意見をお聞かせ下さい。

とき 6月15日(金)  
ところ 中小企業会館センタープラザ16F

会費 会員無料 一般1000円

### ＜私たち新入会員です＞



藤野実美子さん

自宅で洋裁教室をしています。毎日家の中で仕事をしておりますと世の中のことが疎くなると感じまだまだ勉強したいと思いこの度入会させて頂くこととなりました。良い話を聞き多くの人達に会い自分の世界を広げたいと思います。



本田 冴子さん

アパレル関係の仕事をしてますが、以前からKFSのお誘いにより立亀先生の講演やその他の講習会に参加させて頂いておりました。神戸をより美しい街にという願いをもっております。



松田 明美さん

トアロードで手造りの洋装店をしています。洋裁の世界だけでなく幅広く色々な業種の方と交流したいと思っています。又、各分野の先生方のお話をきき、見聞を広めたいと思います。





第12回

# 六甲山牧場

有井 基

—Hazime Arit—

△フリーライター△

カメラ・池田 年夫

若葉が匂う。吹き通る風まで、新緑に染まっている。六甲山頂へ、有料道路のゲートを越えた辺りから、その風のシャワーが、残っていたねむ気を覚ましてくれる。ふもとから車で、20分も走っていないのに。

神戸市立六甲山牧場で「万葉人のたべもの展」(六月三十日まで)が開かれている、というので出かけたのだが、牧場は、また少し、きれいになっていた。牧場内の電線を、すべて地中に埋めるといった目に見えないところにカネをかけるせいもあるのだろう。

面積一二五・八ヘクタール。そのうち甲子園球場の約六倍に当たる二二・七ヘクタールを一般公開している。標高さつと七百メートルだから、晴れた日の大阪湾の眺望も申し分ない。思いっきり深呼吸をしなくなる空気のうまさは、新鮮な再発見でもある。

場長の谷口正夫さんと、この三月末まで九年間、場長をつとめた中村直彦さん(現神戸市北農業委員会事務長の案内で、牧場の中心からやや南寄りの「神戸チーズ館」に入った。三年前(一九八七年)に、約四億円をかけてつくられたチーズ館は地上二階・地下一階。牧場そのものがスイスの山岳酪農をモデルにしただけに、館のデザインもスイスの農家をイメージしたものだという。

褐色の屋根に白い地上二階建て。石壁をまとった地下はチーズ工場だ。牛舎でしぼりたての乳を原料に、カマ

地下1階の工場では、全国でも初めての試みといわれるチーズの製造工程のすべてを見学することができる。



年間70万人の利用者がある六甲山牧場の新たな見学コースとしてすっかり定着した神戸チーズ館。



「観光にしても、リゾートにしてもこれからの時代は人間の生活の原点を問うような施設づくりが必要だ」と語る中村直彦・前場長。



「私も思いは同じです」と谷口正夫・新場長。中村さんの話の一つ一つなつく表情は、ひかえめながらも牧場経営に対する責任感がひしひしと伝わってくる。

ンベールをつくっている。その製造工程のすべてが、ガラス越しに見学できるのも全国初の試みなら、一個（一二〇グラム）八百円の「神戸チーズ」が、年間で十万個売れるというのも、いかにも神戸らしい。

「牧場の乳牛は三十三頭。それだけでは、まかないきれないので、市内の農家に入れてもらっています。しばらくたてミルクとして販売していますしねえ。しかし、製造能力からすればチーズは今で限界ですわ」

畜産専攻とはいえ、チーズづくりについてはズブの素人だった中村さんの、試行錯誤と苦労は想像に余る。

六甲山牧場を、都市と農村の接点と位置づけ、農業や農畜産物の啓蒙普及と消費拡大が役割だとする中村さんは、そのためのアイデアを、次々と実行に移してきた。

「場長に就任した九年前、年間利用者は二十三万人でしたが、今では七十万人。全職員の努力のお陰です」

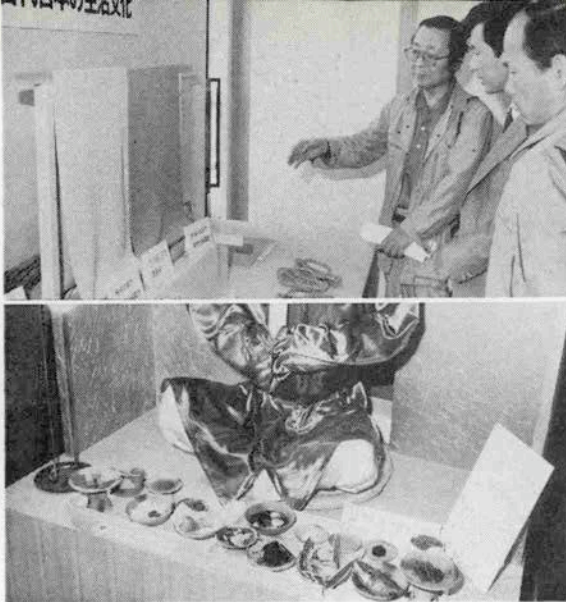
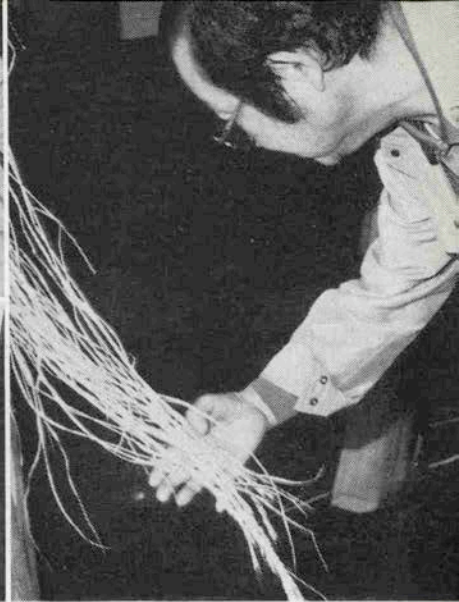
キャッチフレーズの「人間と動物と自然のふれあいの場」には、赤ちゃん五十四を含むヒツジ百五十四のほか、乳牛、馬、ヤギ、ウサギが放たれ、そこに人が溶け込んでいる。なんとという牧歌的風景であろうか。

毛刈りがすんだヒツジたちは涼しげだ。刈りつた毛は一キログラム五百円で売っている。ウール洗剤できれいにしたのを持ち寄って手つむぎの講習会を開き、毛糸にすれば約六百グラム。セーター一着分は出来る。ご婦人がたに喜ばれるのも当然だろう。

「観光やリゾートも、これからの時代は、人間生活の原点を問い、生きざまを追求し、生活を深く豊かに変えるようなものが要求されると思います。展示ホール（チーズ館一階）の企画も、その方向で考えていきたいと思います」と、いつても予算がありませんので、手づくりです。つらいところですよ」

昨年八月、平城京の長屋王邸跡から発掘された木簡（木の板に墨書した文書・木札など）を参考に、牛乳を煮詰める当時の製法で古代チーズ「蘇<sup>モク</sup>」を再現。入場者に試食提供して話題を呼んだ。いま開かれている「万葉





古代日本の食文化、生活文化を探る「万葉人のたべもの展」—写真右/古代日本の米「赤米」の稲を手にとる筆者。左/赤米のぬか、紫稻の草で染められた絹織物(上)と長屋王の食膳(下)

万平方メートルの邸宅跡から出土した木簡は、約五万点にのぼるといふ。

その木簡を解説している奈良国立文化財研究所の協力を得て展示したが、いずれも職員の手づくりだ。コーナ入口のタイムトンネルも、稲わらで堅穴住居を再現し、くぐり抜ける仕組みになっている。平城京に限っていえば、庶民の大半は掘立柱の建物に住んでいたようだが、ひろく「万葉びと」となると、これでいいのだろう。

小学生の団体が多いだけに、正確さ、わかりやすさが求められる。そのため昨年、岡山県総社市の国司神社に伝わる「赤米」のもみを取り寄せ、西区の農家で栽培してもらって約百八十キロを収穫。日を限って入場者に試食提供もした。赤米は中国・雲南省に起源するといわれ、赤い色素を含んでいて、搗き米だと淡いピンクに炊き上がる。国司神社のほか長崎県、鹿児島県の二つの神社から赤米の稲を手に入れ、うるち米やもち米と比較展示したのも心にくい配慮である。

対比の面白さは、子どもたちをも捉える。雲南の地からわが国へ伝えられた赤米が、今も雲南やタイのアカ族などの常食となっているVTR。牛乳を十分の一まで煮つめて「蘇」をつくると同様、アラビアのベドウィンが、数千年変わらぬ製法でジャミード(チーズ)をつくるVTR。いずれも、食文化の伝播、古代と現代の食文化について考えさせる格好の教材だろう。

「長屋王は何を食べていたか?」も、展示の苦心がのぞいている。何しろ、北九州から「ふなずし」が届き、氷をとり寄せて酒のオンザロックを飲んでいた長屋王のことだ。想像される食膳は、豪華をきわめたらう。木簡を手がかりに職員たちが再現したメニューは

イノシシ、シカ、キジ、サケなどの干し物。セリ、ワカメ、カブラ、ヒラタケなどのあつもの。小ダイ、ハマグリ、クラゲ、コノシロなどのなます。アジ、イワシ、アユなどの塩焼き……そして漬物まで四十種余り。

これを日替りメニューで出す。

人のたべもの展——古代日本の食文化を探る」は、その発展的な展開である。

古代の食べ物については「古事記」「日本書紀」「風土記」「万葉集」などにも記述はある。だが今や、木簡のもたらす情報量はおびただしい。とりわけ、政敵・藤原氏の陰謀で一族と共に果てた「悲劇の宰相」長屋王の、六

対照的に「庶民の食膳」は、赤米の飯に代わってアワ、ヒエのめしと煮豆など文字通り一汁一菜だ。食事は一日に二度。激しい労働をする人は間食でつないだが、はたして何でカロリ、カルシウムをおぎない得たやら。

飽食の貴族と、食うにも困る庶民との構図は、このイペントの最も印象的な見どころだろう。だが、草木染の絹織物の微妙な色あいもいい。一つは赤米のぬかで、もう一つは紫稲の草で染めたものだが、これもオリジナルだという。中村さんが目ざした「人間の生活の原点を問うような施設」は、着実に根を下ろしたといえそうである。

だが、課題がないわけではない。神戸というエキゾチックな街だからこそ、モデルとしたスイスの雰囲気がマツチした。後背地に農業という資源があったから、農業振興と文化レクリエーションとが無理なく合わさった。

その特性を生かした本物志向の村づくりが、いま、受けている。さて、次のステップを、どう踏み出すか。

終始ひかえめな谷口新場長も、思いは同じである。二階のレストラン「神戸チーズ」で、チーズフォンデュをメインとするコースをこ馳走になりながら、中村さんの話の一つ一つうなづく谷口さんの表情を見ていて、牧場経営の、人目につかない苦労や、観光牧場としての企画の苦心が痛いほどわかった。

そんなことを抜きにすれば、このレストランは、くつろぎの空間である。大きな山小屋のように天井が高く、南北両面のガラス窓、天窓からの採光も、やわらかな明るさ。客席は六十六席、南に面して席をとれば、牧場のみどりを越えて大阪湾は一望。空のブルーを入れると、これ以上の、自然の良彩にめぐまれた眺めは、他に得がたからう。

メニューは、神戸チーズ主体のチーズ料理、牧場名物バーベキューなど。ヤユする気ではさらさなく、ここにも「神戸市商法」ありと、まぶしい気分さえする。

チーズ館の見学通路から眺めた牧場……。人の心をなごませる牧歌的風景がそこにあった。





■ 第14回神戸文学賞佳作作品

# 夏の遠景

△ 第3回 ▽

伊々田 桃

絵／羽多悦子 △題字も▽



記憶が薄れ、野田メリヤスの車に乗った達男が、目と天井の間にたゆたった。和美とどこで知り合ったのだろう。めくれあがった唇で、和美の滑らかな唇に触れたことがあるのだろうか。

依子は、使わずにおいた千円札を、ジーパンのポケットから引き抜いた。

殊勝なふりして、あの偽善者め。

依子は、口穢く罵り、これ以上小さくならないというところまで、千円札を指でひねりつぶした。

翌日の夕方、依子は大川橋の喫茶店に来ていた。

店の扉が音をたてて開き、分厚い唇が視界に飛び込んできたかと思うと、達男が、片手で拝むようにしながらペコペコと近づいてきた。

「僕、アイスね」

ウェイトレスに注文をして、依子の向かい側に座った。

「帰る寸前になって、得意先から電話が入るもんだから」

達男は、めくれあがった唇を力ませて言い訳をし、おしぼりで額と鼻の頭に浮いた大粒の汗を拭き取る。

「怒ってるの」

「どうして？」

依子は首をかしげて笑った。達男が用心深くしゃべっているのがわかった。そして、依子の内面を読み取ろうとしていることも。その小狡い行為に、依子は苛立ちを覚えたが、顔には表さずにいた。

昨夜八時半頃、和美は達男の運転する車で帰って行った。車の音が遠のいてしばらく経ってから、依子の部屋へ入ってきた母が、

「きょうは済まんかったね」

と言った。

「帰って来て迷惑だったようね」

首を横に振る母の目に、涙が盛り上がってくる。

「何でこんなふうになってしまったんやろう」

父に柔順でありながら、娘の前で愚痴をこぼして泣く

母を、依子は冷然と見つめていた。その惨めな泣き方が、依子を不快の淵に追いやることに、母はいっこうに気がつかないのだ。母の目の前で荷物をまとめ、明日の朝一番にでも、この家を出て行きたい気分に襲われた。

「眠いの、もう、出て行ってくれないかな」

そう言うのと、母は顔から手を離れた。別の返答を期待していたのだろうか、間の抜けた表情で依子を見返した。「婚約のこと、黙っとって悪かったと思うとん、でも……」

用心深く黙りこんでいた達男が、依子との沈黙戦に敗れたように、口を開いた。

「あら、私、気にしてないわよ、かわいい人じゃない、和美さんって、こっちへ帰る前からつきあってるの？」

「自分でも、何がなんだか、よわからんてア」

めくれた唇に、茶色の液体が滲んでいた。見てはいけないものを見てしまった気がして、依子はテーブルの花へ目を移した。

口を切った彼は、勢いづいてしゃべっていた。

六月の初めに、父に連れられて入った中華料理店で、和美を紹介された。その晩に、どうだ、と父に尋ねられ、ええまあ、と口を濁しているうちに、次の日曜日から家事見習いとして、和美は家へやって来るようになった。これまでに二度、映画を観に出かけたことはあるが、気持ちの騒いだことがない。それなのに、電話口で依子の声を聞くだけで、頭の中が依子で埋めつくされてしまい、今、自分がどこにいるのかもわからないような状態になる……。

「達ちゃんて、口がうまいのねえ」

「ほんまのことア」

ストローをやみくもに掻き回した。

アイスコヒーがなくなる頃、ためらいがちに彼が言った。

「ヨッコちゃんは何で三年間も帰らんかったんでア。僕やったら、出て行かへんな、きっと」



「何が言いたいの」

依子の厳しい口調に押されて口を結んだが、彼はやはり言うべきだとも思っただけ、

「おやじさんもおふくろさんも、ヨッコちゃんを大事に思うとるでア」

怒ったように言った。

「いいかげんなこと言わないで。父なんて私を無視してるじゃない」

「それは」

「いいわ、もう」

依子は横を向いた。まなざしの先に、父の頑固な背があった。達男に、もう少ししゃべらせたい気もないことはなかった。

喫茶店を出たところで、偶然、東方から来る和美を見つけた。隠れるには遅すぎるため、平然と待ち受けることになった。半歩前に立つ達男の肩が、緊張で強く引き締まっているのがわかる。

和美は、同じ年頃の女の子と一緒だったが、二人を認めたときに別れていた。昨年できたばかりの文化教室へ、編み物を習いに来ていると言い、振り向いて、あれ、というふう指を差した。その方には、薄桃色の建物が見えた。

和美は駆をもぞもぞと動かし、白いレース糸で花びらを編み、それを幾つもつなぎあわせて長方形にしたものを、かばんの中から取り出した。

「テーブルセンターなんですけど、げた箱の上にどうかと思って、まだすぐへたんですけど、どうかと思って」

受け取ってほしらしく、達男へ差し出し気味に広げる。達男が黙っているの、和美はうなだれてそれを元にしまった。和美は恨めしそうに依子を一瞥してから、おもむろにその場を離れた。

運転席に座ってから、

「ごめん、ちょっと待ってて」

達男が勇んで外へ飛び出した。

懸命に走って行く彼をバックミラーの中に見た。和美に追いつき、何かをさかんに伝えていた。和美は嬉しそうに幾度も首を上下にする。

依子の内に、また苛立たい感情が押し上げてきた。

「菖蒲池に行きたい」

戻ってきた達男に、依子はせがんだ。

「あそこ、花の名前はついてるけど、何にもないただの池でア」

「いいの、行つて」

足で車の底を蹴った。

「変わってるよ、ほんと、ヨッコちゃんは」

車はG町の外れまで走った。

池の水は澄んで、コールドールを詰め込んだようだ。

誰もいないこんなところを狙って捨てに来るのか、所々にこまごまとした不燃物の小山ができている。見るに耐えない、荒廃した景色だ。

「わかったやろ、帰るでア」

ハンドルを切りかけた達男の手に、依子は手を触れ合させた。

「達ちゃん、キスして」

和美を見たために、張り合う気持ち起きたわけではない。和美は問題ではなかった。父にうまく手なづけられている達男を、その手から奪ってやりたいと思った。

唇がめくれあがった唇によってふさがれた時、固い殻のように頑強な父の背中が見えた。

ちくしょう……ちくしょう……

依子は背中に悔しい気持ちをぶつけていた。

帰郷後二週間が経っても、父の態度は変わらなかった。母は常にぎこちなく、一步でも近寄ると身をかわすくせに、時折、意味もなくへつらった笑顔を向ける。結局、依子は家族と隔絶したも同然で、家にいるのが落ち着がなく、気分が荒れたり沈んだりした。

三日に一度の割合で、依子は達男と会っていた。初めは、憂さをまぎらす程度に呼び出していたものが、知らない内に父と張り合う気持ちを起こしていた。何とかして、父の掌中から達男を引きずり出したい。父が築きかけているものをこの手で壊し、父の支配できないものもあるのを、実践でもって見せ付けてやりたかった。

そのために深夜、内線電話を使って、離れにいる達男を起こしもした。

同じ屋敷内では、却って落ち合うことができないのがわかっていながら、依子はわざと、今すぐ会いたい、と駄々をこねる。無理な願いを訴えて困らせることも、相手の気を昂揚させるのに効果がある、と聞いたことがあった。

「僕も会いたい。でも、ここじやどうにもでけんてア。」

わかるやろ」

「わからん、わからん」

興奮した達男の声に乗せられて、依子もつい方言が飛び出す。

「弱ったなア」

声にやるせない哀歎がこもり、これ以上迫ると、達男は真面目に忍んで来そうだ。

「じゃあ、明日の夕方、会ってくれる」

媚びを含んだ甘え声で、達男のこりこりに膨らんだ気持ちを柔らかに撫で、例の場所待ってる、と約束だけはきちんとして、切り上げる。

その夜も、父母が寝静まった頃に電話をかけ、さんざん達男の心に大小の波を掻き立てた。

「いいわ、無理はよすわ。その代わり明日、待ってるか





ら

「ごめん、明日は」

「だめなの」

彼は答えない。

受話器を握った掌が汗ばみ、パジャマで拭った。足元においた懐中電灯の光にまつわりつく蚊に、依子はいららし始めていた。

沈黙が続く間に、受話器がただの黒い物体に見え、投げ出すように電話を切っていた。

翌日になって、達男が和美を映画に誘ったことを知り、依子は屈辱を感じた。がすぐに、自分より和美が優先されたわけは、達男の行動を支配できる父であることに気付いた。

数日前も達男と会い、別れ間際に次の約束をする時、彼は辛そうに口を結んだ。会う回数が増えれば増えるだけ、依子に引き寄せられているのに、いくら心を奪われても、父への義理を失ってはいなかったのだ。

夜が深まるのを待ちくたびれるほど待つて、依子は達男に電話をかけた。彼からもたらされる言葉は、依子の想像していた低姿勢このうえないものではなく、逆に、僕の立場も理解してほしい、と力強く訴えられた。その上、度重なる深夜の電話が、いつのまにか彼の内部に強固な部分を作り上げてしまったのか、じわじわと優位に立ちとうとする。

「何も聞きたくないわ。今からそちらへ行くから。私を愛してるなら、達ちゃんも階下へ出て来てちょうだい、いいわね」

強硬に言い放して切った。

一度部屋へ戻り、パジャマからＴシャツとジーンズに着替えた。部屋をまたそとと出て、そのまま静かに勝手口へ降りた。気持ち静めて鍵を外した。扉を引き開ける時、きりきりとレールの音がした。後ろを振り返って見た。軀が横になって通れるだけ開き、外へ滑るように出た。

冷んやりとした外気が、シャツからはみ出した腕に快い。雨が近いのか、巨抱色の夜空に星はない。草履を地面に擦らないように、一足一足を大きく上げて離れ家へ向かった。暗闇の中に、人の輪郭がやや白く浮き上がって見える。息を静めて近づく。

「怖いことするでア」

腕が伸び、いきなり引き寄せられた。耳たぶに湯気のように熱い息を感じた。危険なところでの抱擁が、二人の軀を熱くした。

「僕の眼中にはヨッコちゃんしかいてへん。あのこには悪いと思ったけど、こればかりはどうしようもないもんア。ヨッコちゃん、あんまり僕を刺激せんといてえな」

達男の手が、依子のＴシャツの上に当たった。シャツの下には、何も身につけていなかった。彼につきまとっている父を押し退けるように、胸元を彼へ向けて突き出した。達男の指はびくっとして離れ、しかしすぐ元の位置に戻り、次第に力を注いできた。

「今度、抱いてええか？」

耳元で達男が喘ぐ。

「車の中なんて厭よ」

「ちや、ちゃんとした場所やったら、ほんだらええんか」  
息遣いが荒くなる彼とは逆に、依子の頭の中は却って冴え渡ってきた。案外、父から達男をもぎ取るのはたやすいかもしれないと思った。唇を触れ合いながら、虫の鳴き声をはっきり聞いていた。

唇が離れると、依子が言った。

「もうすぐお盆やねえ。達ちゃんも和美さん誘って、盆踊りに行くんやろう」

「な、何で、今、そんなこと言うんでア。僕は今、ヨッコちゃんのことしか頭にあらへんのに」

依子の肩を両手で掴んだ。細長い指が皮膚に食い込む。

「もう言わへんか、もう言わへんか」

依子が、うん、と頷くまで、達男は激しい力で揺すり続けた。